

2年生に対する 受験生への切り替え指導

数学や理科の学習内容が増えた新課程では、
どの時期に、どのような指導によって、
生徒を受験生に切り替えさせればよいのだろうか。

岡山県立倉敷青陵高校と、佐賀県立致遠館中学・高校に、
現3年生にどのような指導を行ったのかを聞いた。

学校事例 1

岡山県立倉敷青陵高校

学年集会や模試活用などで 2年生2学期から受験生の自覚を促す

「併願パターン研究」で 入試を意識させる

岡山県立倉敷青陵高校は、東京
大や京都大などの国立大に毎年
200人以上が合格する進学校だ。
受験生への切り替え時期を2年生
1月～3年生9月と捉え、模試、学
年集会、進路通信、面談などを通し
て、生徒に断続的に受験生として
の自覚を促す。受験に向けてスタ
トを切る生徒が学級に数人でも出
てくれば、それに触発されて学習
を始める生徒が増えると、進路指
導課長の三村美紀先生は話す。

「本校では、受験は団体戦として
取り組んでいます。9月第1週の
青陵祭で完全燃焼すると、放課後
に居残り勉強をする3年生がぐっ
と増え、受験勉強一色の雰囲気と

なります。それまでに、互いに切磋
琢磨し合って頑張る集団となるよ
う、様々な働き掛けをしています」

受験生への切り替え指導の端緒
となるのは2年生9月、青陵祭直
後に開く学年集会だ。進路指導課
主任の田野雅人先生は、「青陵祭
では、学年縦割りでチームを組み、
3学年合同で練習を行います。準備
に熱を上げる3年生も、練習後は
学校に残り、自習をします。2年
生はそうした先輩たちの姿を見て、
翌年の自分の姿をイメージします。
そのような刺激を受けている時に
すかさず、教師が入試の具体的な
話をし、入試を自分のことと考え
させるようにしています」と説明
する。

学年集会では、入試までの流れ、
短期的な目標となる模試のスケ

図 「併願パターン研究」

入試日程やセンター試験・個別学力試験の配点を調べ、模試の偏差値を基に合格可能性を算出させて、「チャレンジ校」「実力相応校」「合格確実校」を考えさせる。センター試験の出来によって出願校が変わるため、難易度の異なる大学群を考えておく重要性、思い込みではなく視野を広げる大切さを説く。
*学校資料をそのまま掲載

大学()		学部()		学科(前)		科目		併願	
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

ジュールなどを示しながら学習の進め方を説明する。この時のメインは「併願パターン研究」だ。2年生7月の模試の結果を基に、国立大の併願パターンを考えさせる(図)。進路指導課で3学年担任の岡本崇志先生は次のように話す。「2年生からセンター試験の結果を想定した出願校を考えさせ、憧

理科は補習や土曜講座で1年生から意識付け

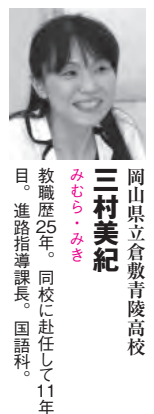
れの大学ばかりが頭にある生徒の視野を広げることを狙いとしています。進路通信でも、いろいろな大学について、難易度だけでなく研究内容なども紹介しています」

5教科の学習を意識させるのも、2年生2学期だ。宿題は、それまで課していた国数英の量は減らさずに、2年生9月から理科と地歴・公民を加える。授業内容の定着はもちろん、5教科を学習する習慣を身に付け、学習の総量を増やすことも狙いだ。また、「併願パターン研究」では各科目の配点も調べさせ、自分の得意・苦手をどう生かして今後の学習を進めるか、5教科全体で考える機会にしている。それらに加え、新課程先行実施生である現3年生では、早い時期から特に理科の学習の意識付けを行ってきた。長期休業中の補習では、1年生から3教科以外に理科も行い、年5回の実力考査では、2年生で「化学基礎」「生物基礎」を加えた。更に、2年生2学期から

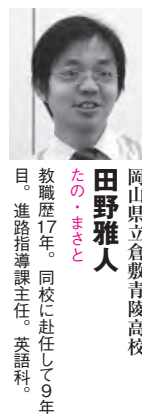
模試を活用し生徒の自律した学習を促す

受験生への切り替えの次の山場は3年生4月だ。最難関大志望者の教科別支援チームが3学年の担当教員を中心に結成され、生徒に入試本番までの講座や添削指導などの支援内容を説明した。

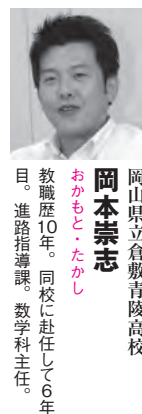
「難関大志望者対象の集会を1年生から度々開き、心構えや学習法を伝えると共に、同じ志の生徒が顔見知りになるようにしてきました。3年生4月に最難関大を目指す生徒を改めて集め、学校が全面的に支援することを伝え、生徒・教員が1つのチームとして意識が高まるようにしました」(田野先生)



岡山県立倉敷青陵高校 三村美紀
みむら・みき
教職歴25年。同校に赴任して11年目。進路指導課長。国語科。



岡山県立倉敷青陵高校 田野雅人
たの・まさひと
教職歴17年。同校に赴任して9年目。進路指導課主任。英語科。



岡山県立倉敷青陵高校 岡本崇志
おかもと・たかし
教職歴10年。同校に赴任して6年目。進路指導課。数学科主任。

創立106年の伝統校。「大きな夢を持つ人を応援します」などの教育目標を「青陵宣言」に掲げ、生徒の進路実現を支援する。◎全日制/普通科/共学/1学年約320人◎14年度入試合格実績(現浪計)/国立大1人、京大1人、東大1人、京都市大1人、岡山大などに236人が合格。私立大は、同志社大、立命館大などに延べ367人が合格。

また、新課程入試に向けて、2年生までの5教科の学習内容の定着度を早期に把握するため、初めて3年生4月に進研模試を行った。「数学や理科の定着度が気になっていましたが、予想通り、理科の成績が全般的に低調でした。ただ、全国の学校も同様の状況であり、集会でそれを生徒に伝え、いち早くスタートを切った者が合格に近づくと強調しました」(岡本先生)
4月の模試の結果返却は、大半

佐賀県立致遠館中学・高校

模試データを継続的に活用し
徐々に受験への意識を高めていく

2年生夏休み明けから
断続的に働き掛ける

でも意識は急に変わりません。2年生から断続的に働き掛け、一段ずつ高めていくように指導します」

例年100人以上が国公立大に

合格する佐賀県立致遠館中学・高校は、2003年に中高一貫校となり、7割弱の生徒が併設中学校から進学する。進路指導主事の吉山耕一郎先生はこう語る。

「伸びる素地は大きいものの、高校受験を経験していないからか、『何とかなるだろう』と気長に構え過ぎる面があります。そのため、進路指導では『自分から動かないと何も変わらない』という意識を持たせることを大切にしています」

受験生への意識の切り替えは、2年生の夏休み後に始まる。3学年主任の尊田和寿先生はこう話す。

「『今日から頑張らなさい』と言っ



佐賀県立致遠館中学・高校
吉山耕一郎
よしやま・こういちろう
教職歴29年。同校に赴任して7年目。進路指導主事、数学担当。



佐賀県立致遠館中学・高校
尊田和寿
そんだ・かずひさ
教職歴20年。同校に赴任して11年目。3学年主任、生物担当。



佐賀県立致遠館中学・高校
平方伸之
ひらかた・のぶゆき
教職歴15年。同校に赴任して11年目。2学年主任、物理担当。

◎校名の由来は佐賀藩校「致遠館」。県内唯一の理数科設置校。2006年度からスーパーサイエンスハイスクール指定校。◎全日制／普通科・理数科／共学／1学年約240人◎14年度入試合格実績（現浪計）／国公立大は、東京大、京都大、九州大、筑波大などに138人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ478人が合格。

2年生の9月初旬に担任や教科担当による進路指導連絡会を開き、生活や学力における学年全体の傾向や課題を把握し、今後の指導方針を共有する。それを受け、担任は生徒一人ひとりの志望状況や模試の結果などを踏まえて面談をし、目標と課題を明確にさせる。その後は、定期的な学年集会、進学講演会や大学説明会、SSH校外研修など、進路を考える機会を多く設けて目標への意識を維持させる。

多くの生徒が受験勉強に本腰を入れるのは、高校総体後の3年生6月だ。この時期には保護者会を開き、保護者の意識も受験に向かわせる。そして、夏休み前に「こ

の夏が勝負を決める」と発破を掛け、勉強合宿やオープンキャンパスへの参加などを通して学習意欲を更に高め、9月の体育大会後には生徒全員が完全に受験に向かう状態を目指している。

模試や添削指導を利用し
受験への意識を維持

進路指導で継続的に活用するのが模試データだ。模試の結果が返却される度に面談を行い、生徒に

現状と向き合わせる。

「結果に一喜一憂して終わるのではなく、志望校と自分との距離を意識させ、『次の模試ではここまで頑張ろう』などと短期目標を持たせます。それを1つひとつ達成することに、徐々に自信を高め、自ら学習に向かう意欲を育みたいと考えています」(尊田先生)

例年、高校総体前は学習意欲が落ちやすかったため、現3年生では、2年生2月のマーク式模試から間を空けずに、4月に進研模試を初めて実施した。それにより、受験意識を保ったまま、高校総体を経て、良い状態で夏休みを迎えられたという。2年生後半に始まる国数英の添削指導も、学力向上に加え、受験意識の維持を目的としている。主に学力上位層の集団を引き上げ、全体への波及効果を狙う。

現3年生の指導が例年と違った点には、理科の扱いがある。理科の定着度にやや課題が見られたため、主に新課程で内容変更が大きかった生物で、2年生2学期から演習を組み込んだと尊田先生は話す。

「授業の進度はやや遅れました

が、十分に理解させながら進めることを優先しました。その分、3年生では進度を少し速めました」

2年生前半までは国数英を中心に進め、模試が5教科となる2年生後半から理社の学習を促すという基本方針は変えなかったが、新課程となる理科は、例年より早めに取り組むように伝えた。ただ、理科の課題の開始時期や量は、他教科とのバランスを考慮し、旧課程から大きくは変更しなかった。

教師自ら模試を分析し その結果を指導改善に生かす

次に現2年生の指導を見ていく。

夏休みのオープンキャンパスには、例年、教師が引率して参加していたが、今年は生徒が個別に参加するように指導した。2学年主任の平方伸之先生は、「志望校のオープンキャンパスの日程を自分で調べ、自分の力で行くことで、覚悟や自覚が促され、目標意識が高まると考えました。生徒は九州だけでなく、東京大や神戸大など遠方の大学のオープンキャンパスにも参加していました」と話す。

同校では、生徒が受験に向かっ

て互いに高め合う集団づくりのため、2年生から成績などを総合的に判断し、2学級(80人)を「グレードクラス」として編成。難関大を目指す生徒が切磋琢磨して伸びていく環境を整えている。現2年生では、その良い面をより引き出すため、新たな取り組みとして、夏休みに志望校群ごとに3グループに分けて学習会を実施した。

「『グレードクラス』の目的は、学力上位層を引っ張ることで、中・下位層を刺激して全体的な底上げを図ることにあります。しかし、そこに入れなかった生徒が意欲を失ったり、クラスに入ったもの付いていけない生徒が出たりすると、学力の二極化が生じる可能性もあります。そこで、3グループに分け、それぞれの集団で高め合えるようにしました」(平方先生)

若手教師が比較的多い現2学年団では、生徒の学力や入試問題を分析する教師の力を高めようと、模試が実施される度に学力層ごとに正解すべき問題などを教師が分析。模試の結果が届いたら、分析

通りであったかを確認している。

「模試の分析結果は学年団で共有し、担当教科にかかわらず生徒に助言できる状態を目指しています。例えば、数学の教師から『もう少し英語も頑張りなさい』と声を掛けられたら、生徒は学年全体に見守られていると実感し、学習意欲を高められるからです」(平方先生)

模試の分析は、教師の自信にもつながると考えている。

「自分の分析通りの結果だった場合はもちろん自信になります。そうでなかったとしても、自身の指導と生徒の現状とのギャップが明確になるため、指導改善に生かします」(平方先生)

今後は、現3年生の状況を見ながら、現2年生への指導にも臨機応変に対応していく考えだ。

「指導の流れは基本的に例年と大きく変わりませんが、新課程で学ぶ量が増加したことによる定着度の低下には注意が必要です。学力層別にこまめに定着度を確認するだけでなく、生徒の気質も十分に考慮し、生徒の可能性を引き出していきたいと思います」(吉山先生)